

# 夢とまじない

花部英雄

Dreams and Incantations

HANABE Hideo

- ① 夢合せ
- ② 夢の呪い
- ③ 夢の呪い歌三首と呪術
- ④ 悪夢は草木に着け

## 【論文要旨】

四五〇〇もの俗信を集めた「北安曇郡郷土誌稿」は、日本の俗信研究の先駆けとなる資料集である。その中の「夢合せ」の項に二〇〇ほどの夢にかかわる俗信がある。まずはこの俗信のうち「夢の予兆」にあたる内容を分析し、民俗としての夢の一般的傾向を明らかにする。次に、「夢の呪い」について、夢を見る以前、以後とに分けてその内容を検討し、夢をどのように受けとめ、それに対応しているかを確認する。さらに呪いのうち韻文形式をとる三首の歌を話題にして、全国的事例からその内容、意味を分析する。そして、この呪い歌の流通の背景に専門の呪術者の関与があることを例証し、呪術儀礼の場で行なわれ、やがて民間に降下してきたことを跡づける。

続いて、呪文の「悪夢着草木好夢滅珠玉」を話題にする。福島県の山都町史に悪夢を見た朝、北に向かい「悪夢ジャク、ソラムク、コウムジョウ」と三回唱えればよいという。前述の呪文を耳に聞いた形で伝えてきたものと思われる。この呪文が求菩提山修験の符呪集にあり、修験山伏がこの祈禱にかかわってきたことがわかる。

同じ呪文が、陰陽道系の呪術を記した南北朝時代の『二中歴』にあり、ここでは人形に悪夢を付着させて水に流したり、焼却したりする作法が記されている。宮廷の陰陽道儀礼の中で、「悪夢は草木に着け」の呪文が唱えられてきたのであろう。平安時代の『簾中抄』や『口遊』では、桑の木に悪夢を語るとある。なぜ桑の木に悪夢を語るのが悪夢祓いになるのか。

現行の民俗を見ていくと、奄美のクチタウエ（呪文）に好い夢は残り悪い夢は草の葉に止まれというのがある。また、南天に夢を語り、揺するという例もある。南天は「難転」の語呂合せであり、さまざまに呪術儀礼に用いられるが、古くは桑が悪夢消滅の草木であった。桑は蚕の食物であり、悪夢を桑の葉に付着させ、蚕に食べてもらうことで悪夢を消滅させるというのがその原義にあったのではないか、というのが本稿の結論となる。

【キーワード】 夢の予兆、夢の呪い、呪い歌、夢と南天と桑

## ① 夢合せ

『北安曇郡郷土誌稿 第四輯 俗信俚諺篇』<sup>(1)</sup>は昭和七年九月に、信濃教育會北安曇部会によって、郷土研究社から上梓された。俗信という語の珍しかった時代に四五〇〇あまりの俗信、諺が一冊の本として公刊されていたことの意義は大きい。後に俗信辞典を編むことになった鈴木棠三が、俗信の概念や採集整理の上で研究者に大きな影響を与えた(『日本俗信辞典』「はじめに」<sup>(2)</sup>)と評価したのはまったくその通りといえる。本書の最後にある一志茂樹「卷末記」によると、採集、編集にあたっては難儀したとの感想が記されている。柳田國男の指導を仰ぎながらとはいえ、俗信研究がなされる以前のこと、暗中模索の状態の中から産まれたものといえる。俗信研究のさきがけとして、かつその指針となった本書を話題にしながら、本稿の「夢とまじない」への研究の懸け橋としていきたい。幸いなことに、本書の「夢合せ」に一九二の俗信と、「呪・願・まじなひ」に一つのまじない歌が出ている。これらを分析の対象にしなから考察を加えていきたい。

さて、「夢合せ」に載せられた俗信は、吉不吉の別なく、また夢の内容別整理といったこともなく、雑然と挙げられている。いまこれに一つの見通しをつけるために、私に整理してみることにする。整理の基準として、まずその夢が好いもの悪いものどちらに受けとめているか、次にそれぞれの夢を内容上から任意に分類してみた。それを表に示すと次のようになる。

表1 夢内容別一覧表

分類項目	好い夢	悪い夢	
自然	天文・気象	11	1
	地勢	7	4
	動物	12	18
	植物	7	5
人工	人造物	5	2
	生活道具	8	3
人事	生業	3	7
	人物	3	6
	生活(食・入浴)	0	17
	社交	3	5
	拾得	0	3
	災難(紛失・洪水・火事・斬殺)	11	5
	便所・糞	4	1
	死・葬儀	9	7

以上は夢の予兆を分類したものである。「蝮の夢を見ると金が溜る」といったパターンであるが、中には、

赤い馬の夢を見れば火に気をつけよ、黒い馬の夢を見ると雪が降る

蛇の切れた夢は悪い、信心しないといけない

死んだ目上の者の夢を見たら気をつける、何かその時は不思議な事があるから

などのように、呪い(呪法)や禁忌と混同しているものもある。なお、次のようなものは明らかに呪いや占いに相当する。

便所へ落ちた夢を見ると餅を搗いて祝ふ(呪い)

馬の夢を見るとお観音様を拜むものだ(呪い)

青山に蛇の夢は産土様の注意(占い)

蛇の夢を見るのは神様へ不信心だから(占い)

魚を澤山捕った夢を見ると火に気をつける(呪い)

大水の夢を見たら火に気をつける(呪い)

火事の夢を見ると屋根に水をかけるもの(呪い)

他にも呪いは最後にまとめて71ある。それらを数に入れなくて集計したのが前掲の表の数値である。

数量的な観点だけから見ると、「動物の夢」が好い悪いともに拮抗していて全体の二割弱である。その内訳は馬、蛇、魚がほとんどであるが、通常かかわりの深い動物であることからくるのかもしれない。好い夢悪い夢で判然としているのは、好い夢では天体・気象、悪い夢では生活(食事、入浴)である。天体は太陽、月が主であるが、江戸時代の『夢合延寿倍』<sup>(3)</sup>でも、好い夢の筆頭は日の出、日輪である。古代エジプトの夢の解釈を著した『夢占い事典』<sup>(4)</sup>でも、太陽の夢は王、月は美女の象徴表現と解釈している。

反対の悪い夢の食事・入浴は、たとえば「物を食べた夢を見ると風邪を引く」や「湯に入っている夢を見ると死人がある」などと言う。起きている時間帯では楽しく快適なものであるはずのことが、夢に見ると反対になるのはどうしてであろうか。こうした逆転現象は、「災難や死・葬儀の夢」を吉夢とするのと軌を一にしているといえる。つまり、「夢は逆夢」の発想と同じで、嫌な夢は実は瑞兆で、逆に好い夢を警戒にしようとするもので、生と死のできことを反対に扱う論理と同一といえる。夢を日常に合わせながらも、起きてからの平常に引きずらないような配慮工夫がされているのではないだろうか。

次に、吉凶を表わす具体的表現について見ておきたい。好い夢を「吉」「よい」といった抽象的表現をとるのが一番多いが、続いて「金が溜まる(10)」、「子が生まれる(7)」、「立身出世する(6)」、「縁談がまるとまる(5)」、「命が長い(5)」とある。反対に悪い夢の表現では、「人の死や不幸がある(42)」が断トツで、次に「風邪を引く(31)」、「悪い、災難、凶事に遭う(11)」などと続く。何を禍福とするかの平常の生活の指標が、こうした表現に示されていると受けとめられる。その点において、庶民生活の内実を表わしているといえる。

さて、見た夢がどのような現実に対応しているのかを現実に合わせて予測していくのが夢の予兆である。これまで話題にしてきたのは、夢の内容をどのように判断しているかである。続いて合わせた現実が思わしくない場合に、その夢にどのように対処したらいいのかの手引きを示すのが、呪い(呪法)である。予兆を受けた次の段階にある。

## ② 夢の呪い

『北安曇郡郷土誌稿 第四輯 俗信俚諺篇』に載る夢のまじないの内、「夢判断一富士二鷹三茄子四葬式五火事」「夜明けの夢は正夢」「夢は五臓の疲れ」などの諺を除く51件を、夢を見る以前、夢を見た後といった事前事後の区分をすると、事前の呪いや禁忌には次のようなものがある。

寝る前に念仏を三回唱えて寝るとこわい夢を見ない

夢を見て困る時は枕の下に鉄を入れて寝るとよい

帯を枕にして寝ると長い夢を見る

夜茶を飲めば夢を見る

左手を下にして寝ると夢を見る

事前の呪いは、いわば夢の予防対策である。寝る前の念仏三唱は仏への祈願なのであろう。また、鉄を枕の下に入れるのは夢を切るという連想につながる。同じことは帯を枕代わりにする場合も、帯の長さが夢の長さに通じる発想といえる。寝しな茶を避けるのは、なるべく興奮を抑え慎む配慮ということだろう。左手の枕も、身体的抑圧を意味するのだろうか。夢を見ないための事前の対応には、夢に対する神経質なまでの心遣いが示されている。

夢は見るものと言うが、はたしてそうなのだろうか。確かに客観的に自分が夢の外側から見ているような気がするが、それは覚めた後からの観察、想起にすぎない。柄谷行人に言わせれば、「夢の世界ではわれわれは文字通りに夢中に生きている」<sup>(5)</sup>のだという。恐ろしさのあまりに声を発した自分の声に驚いて目を覚まし、夢であることにホッとすること。こうした恐怖の夢は夢合せ以前に、もう二度と見たくないと誰しもが思うであろう。夢見の事前の呪いには過敏なまでの夢の恐怖への対処術がうかがえる。

これに対して、夢を見た事後の対応を示す呪いには次のようなものが載せられている。

良い夢を見たら四つ前は人に話すな

悪夢は人に話せ

鳥の夢を見たと云うといけぬ

下駄の歯が欠けた夢を見た時はどれでも自分の下駄の歯を一枚抜いて捨てるよ

悪い夢を見た時は五月五日に作った粽ちまきを見ると其の悪夢が消える

先祖様の夢を見たら線香をあげる

魚や蛇の夢を見たらお産土様にお参りしろ

夢で白い幣束を見れば産土神と心得よ

夢流しの歌

見し夢はばくの餌食になるからは心も晴し暁の空、「アビラオンケンスワカ」と三度唱える

蛇の夢を見て気持ち悪い時は、男は「夢見てさめて枕の下の

小脇差抜いて見ても何事もなしオンアビラオンケン（三度）」

女は「夢見てさめて枕の下の玉手箱開けて見ても何事もなし

オンアビラオンケン（三度）」と唱えると夢が消える。（まじ

なひ・祈願・呪）

好い夢は人に話すなどというのは、昔話「夢見小僧」のテーマにかかわる重要な禁忌モチーフである。話せば夢が相手に移ると説かれるが、「四つ」すなわち午前十時以降はすでに本人に固着して移らないことをいうのだろうか。鳥の夢を話してはいけないとあるが、これは瑞夢なのかどうかはつきりしない。

下駄の歯が欠けた夢は、その通り現実的な処置をすることで災いなし。「五月五日の粽」を見れば悪夢が消えるというのは、粽を邪気を祓う儀礼食として仏に供えることから、その効力を期待するものである。続く先祖や産土神などが呪い対策にかかわるのは、夢と神仏との密なる関係を示すものといえる。夢を「神仏の論し」とするのは一般的で、先祖や神仏への信心を強調するものであろう。

夢流し歌が三首報告されている。一首目のバク（猿）の歌は、悪夢をバクに食わせたのもう何事も起こらない。蛇の夢に対する男歌は、小脇差を抜いたが何事もなし、女歌も玉手箱を開けたが何事もなし、といずれも皆無を強調することで不安を解き放つことになるのである。

呪いに歌を用いるのは専門家のかかわりを予想させる。それはアブラオンケンという呪文を挿入していることから、山伏修験の影響下にある

といえる。呪いには本来、職業的呪術師のかかわってきたが、夢の呪術についても同様といえるが、そのことを確認するために、次に全国的事例をあげながら考察していきたい。

### ③ 夢の呪い歌三首と呪術

『北安曇郡郷土誌稿 第四輯 俗信俚諺篇』に強く刺激を受けて採集しまとめた「肥後国阿蘇郡俗信誌」(旅と伝説九一五、昭和一一年)に、  
獺の夢の呪い歌が載せられている。

前夜悪しき夢を見た時には、翌朝ゴット起きに(起きてすぐ)何も食わぬうちによーべの夢を天の獺(又はパフ)に食はすると三回唱えて、天に唾を三度はけば、その悪難をのがると云ふ。

見し夢をばくの餌食となせし夜に 明日も晴れし あけぼの空を三遍詠む

今晚の夢は獺に食はする 獺に食はする と三遍唱える<sup>(6)</sup>

しかし天に唾する<sup>(7)</sup>のは、通常のモラルからすれば忌まれる行為であるが、尋常を超えた事態であることをほめかしているのであろうか。「今晚の夢は獺に食はする」と事前の呪いまでも用意する周到ぶりである。徳島では、「悪い夢を見たら 昨夜の夢は獺に食わせ と三度いふて、南天の木に水をかけるとよい<sup>(7)</sup>」とある。南天に水を掛けるのは「難を転ずる」の意として各地に伝わるが、このことについては後に触れる。青森県八戸市のいたこの伝承によると、

吉き夢なら我が屋に福守らせ給ふ 悪しき夢なら天の獺に申し奉る

かっかと鳴く鳥 夢がやさいかや アク アクマド ソウカ  
(「いたこの伝承」小井川潤二郎)

とある。目の不自由ないたこは、師匠から声の伝授が基本であるから詞章に個人差が大きい。「アク アクマド ソウカ」は聞きようによつてはアブラウンケンソワカに通じるとも言えなくはない。

ところで、この獺の歌が文字に記録されていたものの報告もある。千葉県鎌ヶ谷市史に「諸国扣帳」からとして「夢ナガシ歌/見タユメヲ天バクノエヂキニスルカラハ心モハレルアケボノ空/天バクニクワセロ」とある。諸国扣帳<sup>(8)</sup>に関する説明記事がないのでわからないが、文字を識る人のどのような関与があったものであろうか。北安曇郡と同様に「夢ナガシ歌」とするのは共通している。

江戸末期の弘化四年(一八四七)筆写の「庭訓往来相指釈」にも、「見し夢をばくの多しきになすならハ心もはれし曙の空」という呪い歌が記されている。どこで誰が筆写したものかわからないが、この中には多岐の種類にわたる呪歌が写されており、これを祈祷等に用いるために書写したものかと思われる。

北安曇郡郷土誌稿にある夢の呪い歌のもう一つは、先述した蛇の「夢流し歌」である。男女両用が記されていたが、男用の歌は寡聞にして他に例を知らないが、女用の歌なら事例がある。たとえば、同県諏訪湖畔地方の歌として、昭和九年刊の雑誌「旅と伝説」に「気持ちの悪い夢を見た時/夢見てさめて枕の下の玉手箱あけて見たれば何事もなし/アピラウンケンソワカと三度唱える<sup>(8)</sup>」とある。他にも、岡山県加東郡市場村に「悪い夢を見た時/夢を見た夢を見た 枕の下の空手箱 あけてみれば何ごともなし/この歌を三回唱えて枕を裏返して寝るといい<sup>(9)</sup>」とある。ただしここでは玉手箱が「空手箱」になっている。何もなしの連想から「空」<sup>(9)</sup>に変わったのかもしれない。作法に「枕を裏返し」とあるか

ら箱枕を暗示しているのであろう。

岩手県岩泉町では、「気がかりな夢を払う」として、「夢見た夢見た／枕の下の玉手箱／良き夢なり／明けて開いて栄うるべし／悪しき夢なり／天竺の猿に申す／アピラウンケンソワカ／アピラウンケンソワカ／アピラウンケンソワカ」とある。ここでは玉手箱が夢を入れる器の働きをなし、吉凶に応じて、その後の作法を変えている。玉手箱の玉はすなわち魂で、夢を見せる源泉といった発想に基づいているようである。静岡県の場合は、

悪い夢を見てしまった場合は、「夢ケヤシ（戻し）」の歌よみをする

夢覚めて枕の下の玉手箱 開けてみれば何事もなし  
夢をみて三日三夜慎めば 悪しきは祓い善きは栄えよ<sup>(11)</sup>

とあり、これは「玉手箱」である。なお、ここでは夢流しを「夢ケヤシ（戻し）」と類似の語が用いられている。さらに注意されるのは、歌を暗誦するのを「歌よみをする」と述べていることである。「ウタヨミ」という民俗語彙は一般庶民が呪い歌を唱えることとは段階の異なる用法であった。先に取り上げた「肥後国阿蘇郡俗信誌」によると、阿蘇郡では唱えごと一般を「うたよみ」と称すると言い、

此のうたよみを行ふ時の儀礼としては、当郡古城村北坂梨にては、必ずこの咒歌呪句を三度唱へて、最後にアブラ（又はオン）ケンソワカとの真言を加え、口より息をフツフツと出して吹きつけるのである……

と儀礼作法を記している。これは修験系の祈禱法である。それが民間に

降下し流通されてきたのだといえる。ウタヨミの事例について、さらに夢流しの歌の事例を紹介する。和歌山県では、

次の歌ヒ詠ミをすれば消える

奥山の根なし葛が夢みせた夢は逆夢罪は滅べる<sup>(12)</sup>

とある。「歌ヒ詠ミ」の表現は、単に唱えるというより、儀礼を感じさせる。ウタヨミの語は本州から奄美大島まで広く報告されているので、かつて専門的に利用して歩いた呪術者の存在が予想される。

ところで、「根なし葛」の歌であるが、同じ和歌山県の西牟婁郡では、「夢見が悪ければ夢もどきして／ゆうべ夢見た根なしかつらの夢を見た今朝起きてみると何事もなく、ナムアブラウンケンソワカ（3回）」とある。こちらでは根なし葛が夢を見せたのではなく、根なし葛の夢を見た、主体が夢を見る側へと変化している。どちらがもとになるのか決めがたいが、他の木に巻きついて生きる蔓性の葛の習性をとらえて、根（根拠）がないからどこかに消えてしまい悪い影響を残さないというのが趣旨であろう。

江戸の元禄十四年刊記の『陰陽師調法記』の三十二「あしきゆめの夢違の咒」に三首の歌があり、その一つが「おく山の根なしかつらに見つる夢ことなし草に見ゆるなりケリ 三べんよむべし」とある。呪術や祈禱の需要はあったとしても、書肆から一般読者に呪いが商品販売として提供されたのでは、呪術者の生きる手立てがなくなっていくことになる。なおこの歌は、「修験深秘行法符咒集」巻九「三百四十六 見悪夢時違大事」に儀礼作法とともに載っている。それによると、人形に「奥山ノ根無シ葛ヲ見ル夢事無草ニ巴ル也ケリ」の歌の他に二首の歌を書き、息を吹きかけ祓うとある。この作法は阿蘇郡のうたよみと同様である。明らかに修験が祈禱の呪法に用いていたものである。

呪い歌は、本来呪術者の呪法儀礼の一環として表現されたものであるが、商品化の流れもあって、歌や呪文だけが脱落するようにして、一部信奉者等に細々と保持伝えられてきたといえる。こうした命脈を保ってきた呪い歌の姿を、一つの歌を例に取り上げ、その歴史的展開をたどりつつ呪術の原理を探ることにしたい。

#### ④ 悪夢は草木に着け

福島県耶麻郡山都町の『山都町史』の「呪術」の項に次の呪い歌がある。

悪夢をみた時は、朝早く起きて顔を洗い、北に向かって手を合わせ「悪夢ジャク、ソウモク、コウムジョウ」と三回唱えると夢が払われる<sup>(16)</sup>

起き抜けの悪夢祓いの所作の中で、唱える言葉が不明である。おそらくこれ話を話してくれた人も、意味不明のままに伝えたものと思われる。伝承の事例としては他に例を知らない片々たるものといえるが、しかしここに一例報告されたことによって、実は伝承世界への展望が開けることになった。

この呪文の形を想像させるものが、江戸時代後期の『夢うらなひ』にある。

あしき夢を見たるとなへうちがみとき此歌を三べん唱となへうちがみ氏神を拜すれば吉夢と変すべし

見し夢をばくのゑじきなすからに心もはれしあけほののそら

また法はほう

悪夢著草木あくむつくさうもく 好夢滅珠玉先咎矣こうむめつしゆぎよくをなしとが

右は水を飲東に向ひ唱ふ  
また法はほう

急如律令  
この符ふうを男は左女は右の手にかきて一切の災わざはひをはらひ吉事きちじになすと也<sup>(17)</sup>

山都町史をこれに比較するに、「悪夢ジャク、ソウモク、コウムジョウ」は、「悪夢著草木 好夢滅珠玉先咎矣」の一部脱落転訛したもので、明らかに文字からではなく耳から聞いて覚えていた呪文であろう。また「北に向かつて」は「東に向ひ」での記憶違いかもしれない。『夢うらなひ』以外の資料もすべて東になっているからである。おそらく呪術儀礼の場等で聞いたものを記憶していたものである。それでは江戸後期に出板された『夢うらなひ』は何に基づいたものであろうか。

北九州の求菩提山修験たちが利用した符呪集の中に、これと同じような呪符がある。呪術儀礼に用いたものと思われる。

悪夢ヲ察タル時善事ニ成法並符

孫真人云ク 悪夢ヲ察シタラバ人ニ語ベカラス 先水ヲ以テ東方

ニ向テ撰之呪メ曰

悪夢着草木好夢滅珠玉先咎矣

此文ヲ唱ユベシ 善事ニナルナリ、此符ヲ書テモ吉

唵急如律令

此符ヲ男ハ左ノ手 女ハ右ノ手ニ書テ吉ナリ<sup>(18)</sup>

『夢うらなひ』との異同を見ると、初めに呪符の出所を「孫真人云ク」と提示する。また、悪夢を「人ニ語ベカラス」は、『夢うらなひ』にはない。「法」は「文」とあり、水をどうするのかについての言及がない。

孫真人とは求菩提山修験に關係する人なのか、悪夢は人に語ることをせず、まず水を持ち東方に向かつて、ゆったりと悪夢の呪文を唱えれば好い。また符に書いてもいいが、男は右手、女は左手で書くといいとある。具体的な処方等が示されており、依頼者に応じる際の対応マニュアルといえる。これがいつの記録か定かではないが、こういった呪符が修験の手元から離れて、やがて都市において出版化され「夢うらなひ」に記載されたのではないかと思われる。

さて、ここまでは近世以降の事例である。続いて、中世にさかのぼって見ていくことにする。鎌倉時代の建久年間に書かれたとされる百科辞書の『二中歴』に同様の呪いが出ている。

#### 悪夢相時誦

辛国乃三竹丹鳴鹿毛知加倍乎須礼八由留佐礼尔介里

一説云 悪夢着草木好夢成寶玉

今案左平手取人形右手取水向東戸三遍誦之捨之

一云 南無成就須彌功德王如来三反

手云議曰左手取人形向東方三遍

誦人形火捨之云々<sup>19)</sup>

こちらは漢文である。タイトルは悪夢を相誦文という意味であろう。まず「辛国乃」の歌がある。この歌の類話は平安時代の藤原清輔の歌学書『袋草紙』の「誦文歌」に、「吉備大臣夢違誦文歌」として「あらちをのかるやのさきにたつしかもちかへをすればちかふとそそく」とある。次に一説として、「悪夢着草」の呪文が取りあげられるが、「好夢滅珠玉」が「好夢成寶玉」と字句が違っている。好い夢は宝と成れとする方が理にかなっている。さらに「須彌功德王如来」という如来名からすると、これが仏教系のものかもしれない。そのことは続く儀礼の作法

が、これまでと違い、左手に「人形」<sup>ひとがた</sup>を持ち、右手に水を持って東戸に捨てよとある。同じく人形を火に燃やせというのものもある。悪夢を人形に込めて水に流したり焼却したりするのは、これが陰陽師の祓えの思想と重なる。求菩提山の符呪が、修験系とすればこちらは陰陽師系といえる。

続いて、平安末期の藤原資隆の『簾中抄』には次のようにある。

あしき夢見たる時の歌 からくにのその、みたけになくしかもちかへをすればゆるされにけり

又云 南無功德 須彌巖王如来廿一反

又云 悪夢着草木 吉夢成寶玉

東に向て水をそ、きて三反これをとなふれはとかなし。あるひは

くはの木のもとにて夢に見る事をいひてかくとなふへしといへり

又夢のよしあしをたやすく人にかたるへからすよき夢見たる時の頌

福德増す長須彌功德神変王如来

又云 南無成就須彌功德王如来三反<sup>20)</sup>

『二中歴』と違うのは、「くはの木のもとにて夢に見る事をいひてかくとなふへし」とあるところである。悪い夢を桑の木のもとで話せとある。これは二中歴以後の資料にはなかったものである。これを陰陽師以前と考えると、興味深い資料が、幼童の教科書として書かれたとされる『口遊』にある。

悪夢着草木。吉夢成寶玉。謂之夢頌。

今案。到桑樹下談所見夢誦之三遍。<sup>21)</sup>

これは儀礼をとまわらないシンプルな「夢頌」である。桑樹に悪夢を語って祓うというのは宗教者の関与を離れた素朴な呪いの姿である。



「草木」が桑であったとして、ではなぜ桑なのか、桑に語ることがどうして悪夢を祓うことになるのかが次の課題である。

民間伝承の中の夢の呪いに、植物が登場する例には南天がある。

○夢をみて三日三夜慎めば悪しきは祓い善きは栄えよ

また、南天をみながら「猥食え」と三回唱える。(静岡)<sup>(22)</sup>

○(悪い夢を見たら)朝真先に南天の木に言ふと差支えない。(和歌山)<sup>(23)</sup>

○朝、人に話さずナンテンの葉を採って三度葉末の方へなでる。(静岡磐田郡)<sup>(24)</sup>

南天は「難転」の語呂合わせで、庭木や縁起物等として重宝される。悪い夢を見ないために、蒲団の下に敷いて寝るといいうのも多く分布する。しかし、桑は出てこない。他に植物が出てくるものとして、鹿児島県奄美大島のクチャヴェ(口崇べ)といわれる呪文に、悪夢を見たら次の呪文を唱えればよいという。

ゆぶい みちゃん いむいや

ゐい いむい のほてい

わるさん いむいや

はるばるぬ

くさぬねに とうまれい

いむいや

はるばるぬ

くさぬ

ぬれいば

昨夜見た夢は

良い夢は残って

悪い夢は

原々の

草の根に止まれ

(悪い) 夢は

原々の

草の

ぬれ葉(にとまれ)<sup>(25)</sup>

このクチャヴェにもとづいた「夢や原々ぬ草ぬれ葉」という諺も知られる。また鳥歌に、「夢を見たからといって夢語りをするな/夢は野原の草のうら葉へと行ってしまふ」とある。悪い夢を草の根や葉に唱えることによって、根や葉に移し付着させてしまふことによって難を逃れるという発想である。

長崎県対馬の「夢ちかえの祭文」の一部に「なおもあしき夢おあしのうらほにかきつけてあまのさかさまになかしすつる」という詞章がある。悪しき夢を葦の裏葉に書いて逆さま川に流し捨てるという内容である。流し去るという発想は、静岡の「南天をみながら「猥食え」と三回唱える」の場合、南天の葉に留まった悪夢を猥に食わせ消し去ると同じ意味である。とすれば、桑の葉につけた悪夢を蚕に食べてもらうということ、同様の現実的なアナロジーといえる。南天はある時代から流行的に用いられることになったとして、それ以前には蚕の栽培にもとづいた発想からこの呪文は構成されているのではないか、というのが本稿のささやかな結論となる。仮説として提示し、今後論理の補強を図ってきたい。

註

- (1) 『北安曇郡郷土誌稿 第四輯 俗信俚諺篇』(信濃教育會北安曇部會編、郷土研究社、昭和七年発行(昭和五四復刻))
- (2) 『日本俗信辞典』(角川書店、昭和五七年)
- (3) 『夢うらなひ』(江戸時代後期) (江戸時代女性文庫10、大空社、平成六年)
- (4) 『夢占い事典』(M・ボングラチュ、I・ザントナー著、種村季弘他訳、河出書房新社、平成六年)
- (5) 『意味という病』(講談社文芸文庫、平成元年)
- (6) 『肥後国阿蘇郡俗信誌』(『旅と傳説』九一五、昭和十一年)
- (7) 『阿波の言ひ習はし』(『近畿民俗』二三号、昭和三十三年)
- (8) 『唱へごと集』(『旅と傳説』七七八、昭和九年)
- (9) 『播州加東郡市場村附近の呪文歌と呪ひ』(『旅と傳説』九一二、昭和十一年)
- (10) 『火っこをたんもうれー岩泉のむかし話』(高橋貞子編、熊谷印刷出版部、

- 昭和五十二年)
- (11) 『静岡県史 資料編25 民俗三』(静岡県、平成三年)
  - (12) 『紀北の俗信(二)』(『旅と傳説』二二七、昭和十四年)
  - (13) 『まじなひの資料―紀伊国西牟婁郡宮里村―』(『旅と傳説』二二七、昭和十四年)
  - (14) 『陰陽師調法記』(『重宝記集一』勉誠社、昭和五十四年)
  - (15) 『修験深秘行法符咒集』(『増補改訂日本大藏経』第九九卷、昭和五三年)
  - (16) 『山都町史 第三卷 民俗編』(山都町、昭和六一年)
  - (17) 註(3)に同じ
  - (18) 『求菩提山呪符』(重松敏美『求菩提山の修験文化故』豊前市教育委員会、昭和四四年)
  - (19) 『二中歴』(『改訂史籍集覧』第三三冊、臨川書店、昭和五九年復刻版)
  - (20) 『簾中抄』(『古辞書』古辞書叢書刊行会、昭和五三年)
  - (21) 『口遊』(『統群書類従』第三二輯上、統群書類従完成会、大正一四年)
  - (22) 註(11)に同じ
  - (23) 註(12)『紀北の俗信(二)』に同じ
  - (24) 註(2)『日本俗信辞典』に同じ。「雨天」の項に多くの夢に関する事例あり
  - (25) 『南島口承文芸研究叙説』(田畑千秋著、第一書房、平成一七年)
  - (26) 『国分家文書1』(『音声としての呪文・呪歌・唱え言の総合的研究』国學院大學特別推進研究調査報告書、平成二三年)

(國學院大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月二一日審査終了)

---

## Dreams and Incantations

HANABE Hideo

“Kitaazumi-gun Kyodoshiko,” gathering as much as 4,500 folk beliefs, is a collection of materials that pioneered the study of Japanese folk beliefs. In these materials, about 200 folk beliefs related to dreams are treated in the “oneiromancy” section. Among these folk beliefs, this article first analyzes the contents of the “omen of dream” and clarifies the general pattern of dreams as folk culture. Subsequently, it examines the contents of the “curse of dream” before and after having dreams and confirms how people treat dreams and react to them. Furthermore, it deals with three curse songs of the verse form and analyzes the contents and meanings based on nationwide examples. Finally, it exemplifies the involvement of professional magicians in circulating these curse songs and proves that the songs were performed at venues of magic rituals, before eventually spreading to common people.

Subsequently, the article deals with the incantation of “akumu tsuku somoku-ni komu messu shugyoku-wo.” According to the history of Yamato, Fukushima, when you awoke from a bad dream in the morning, you might want to face north and repeat “akumujaku, soramuku, komujo.” three times. This seems to have been transmitted by ear from the incantation mentioned above, which appears in the collection of incantations for the Mt. Kubote mountaineering ascetics, suggesting that the mountaineering ascetics were involved in this prayer.

The same incantation appears in “Nichureki” of the Nanboku-cho period, in which the incantations of the Yin-Yang school are described, and for the above incantation, how to attach a nightmare to a doll and let water carry it away or burn it is explained. The incantation of wishing “a nightmare attached to trees and plants” would have been chanted in the Yin-Yang rituals at the Imperial Court. “Renchusho” and “Kuchizusami” of the Heian period cite explaining a nightmare to a mulberry tree. Why would doing so result in the expulsion of a nightmare?

Among existing folk customs, Amami has kuchitave incantation wishing a good dream stay and a bad dream attached to leaves of grass. There is also an example of explaining a dream to nanten nandina and shaking it. Because the Japanese word “nanten” also means “change of bad luck,” it is used for various magic rituals. In ancient times, mulberry trees banished nightmares. People might have believed that because mulberries were eaten by silkworms, nightmares attached to mulberry leaves would also be eaten by silkworms and disappear. This is the conclusion of this article.

Key words: Omen of dream, Curse of dream, Curse song, Dreams and Nandina and mulberry

---